新・博多映画街㊻
あれこれ

「リリイ・シュシュのすべて」と「GO」

松宮 仁

観客動員数も興行収入も日本記録を達成したのが、「千と千尋の神隠し」。なんだかんだいっても今年の日本での映画№1。大人から子どもまでだれもが楽しめる映画。こんな映画って少ないよね。最近の日本映画はつまらん、みたいなことを言ってる人がいるけど、日本映画だってけっこうおもしろいのあるよ。だれだったか、映画監督が言ってたけど、日本映画で足りないのは予算だけだって。たしかにそう思う。もう少しお金かければいい映画になるのになあってというのがいっぱいある。

先日、「陰陽師」見て、すぐその後に「トゥームレイダー」見たけど。やっぱり迫力が違うわ。出てくるエクストラの数も全然違うし、SFXだって比べものにならない。「陰陽師」に限らず、日本の映画って見ている最中に、あー、製作費が集まらなかったんだとつい同情してしまうことがある。映画も同情されたら終わりかも。じゃあ、「トゥームレイダー」がいい映画かと言えば、あいかわらずこういう映画には中身がない。でも、エンターテイメントならこれでいいんだろうけど。「トゥームレイダー」って、もともとがコンピュータ・ゲームなんだから。映画は、楽しければいいんだ。それに、主演のアンジェリーナ・ジョリーはとても魅力的だし。主演女優がキレイだとそれだけでいい。暗いところに2時間もいるんだったら、せめてキレイな人を見ていたい。そういう意味で「ブリジット・ジョーンズの日記」とかイマイチだったり。「ソードフィッシュ」はよかった。ハル・ベリーの抜群のスタイルが。それだけじゃなくて、映画の中身も◎(にじゅうまる)。もう冒頭のシーンでガーン。銀行の前で爆発するシーン。1.5秒の出来事を30秒に引き延ばして、カメラが200度の弧を描きながら交差点を横断していき、かつ1台のパトカーの車内と銀行の向かいのコーヒーショップの店内を通過するというもの。たぶんまったくわからないでしょう。まだ、見てない人はこのシーンだけでもすぐに見てください。すごいから。

話は、日本映画。巨匠監督もがんばっている。市川崑監督の「かあちゃん」、それに今村昌平監督の「赤い橋の下のぬるい水」。「赤い橋の…」は、なんだかリアリティがなかった。カンヌで賞とった「うなぎ」と同じキャスティングなんだけど。役所広司はいいとしても清水美砂ってミスキャストじゃないの。なにしろシモの話なんで、一歩間違えばピンク映画になってしまうからか。それにしても、セックスするんだったらちゃんとそれらしくしてほしいよ。べつに役所広司のお尻なんかだれも見たくないって。

ミスキャストと言えば、「冷静と情熱のあいだ」のケリー・チャン。どうして日本語しゃべってたらいつのまにか英語に変わってるんだろうって思ったら、途端にリアリティがなくなってしまう。香港とか台湾では超人気の歌手なんだから、日本に連れてきて無理やり日本語をしゃべらせるのはちょっとかわいそくない。

あー、なんだかまた日本映画の悪口になってしまった。最近の日本映画にもいい映画があるって。さっき書いたけど。たとえば、「ダンボール ハウスガール」。一生懸命貯めた500万円(どうしてこの金額なんだろう)を盗まれて、失業して、

額縁・洋画材料・デザイン用品
大崎周水堂
(271)1696

財団法人
黒田奨学会
福岡市中央区大名2－2－41－308

フラワーズ
Qtame キュータネ
九州種苗株式会社
本社 〒812-0061 福岡市東区筥松新町1番11号
TEL(092)621-2100(代) FAX(092)623-4110番
キュータネ・インテラス(川端店)
TEL (092)281-0917番
FAX (092)281-9015番
キュータネ・マリアハウス(親不孝通店)
TEL・FAX (092)734-0008番
キュータネ・グリーンテラス(筑紫野店)
TEL (092)928-5055番
FAX (092)928-5530番

恋人とも別れて、身よりもなくダンボールの家で生活しなければならなくなったキレイな女の子の話。少し設定に無理がなくはないが、要するに人生を一から始め直して、社会から離れてダンボールの家で生活している人たちとともに生活するなかで新しい人生を見いだそうとするもの。

そう言えば、「赤い橋の下のぬるい水」の出発点もよく似ていた。失業中の中年の男(役所広司)が、こちらはダンボールではなくよくある青い養生シートで雨よけしたようなバラックの家に住む老人から、赤い橋が見えるある場所に宝物を隠してあるから探してくれと頼まれることからはじまった。

こんな世の中だから人生、見直そうよっていう映画がたくさんつくられている。それも、10代の若者の苦しみとか葛藤とかを映画にしている。カッコよく言えば、若者へのメッセージ、人生大事にしろよ見たいな。昔、映画って若者にとってものすごい影響力があったよね。映画見て、励まされて、俺も映画の主人公みたいになるぞって、拳握りしめて、映画館を後にしたものさ。

「プラトニック・セックス」の主人公の少女は、世間体ばかりを気にしている父親に殴られて家を出てしまう。かばうことさえしない母親。少女は、少女なりに苦しみ、親に助けを求めていたはずなのに、逆の行動をしてしまう親たち。なんか哀しいよね。

大人は何も判ってくれない。多くの子どもたちは、こう思っているのだろう。「リリイ・シュシュのすべて」の場合にはもっと深刻だ。なにしろ大人がほとんど登場してこないし、ほとんど存在感がない。子どもたちの心のなかにはもう大人は不在なのだ。唯一、登場するのが若い女性教師。すごく子どもたちのことを親身になっているんだが、たよりなく、無力でなにもしてやれない。この女性教師が、すべての大人を代表していると言いたいのだろうか。行き場のない子どもたちは、リリイ・シュシュという名のカリスマ歌手を生きる拠り所にし、Eメールの電子掲示板というかたちでお互いの存在を認めあう。それは、もっとも心の通わないコミュニケーション手段にほかならない。虐める子どもも虐められる子どももどちらもつらいんだ。そのやり場のない気持ちを何処へぶつけたらいいのだろう。大人は、だれも受け止めてはくれない。

受け止めすぎなのが「GO」。息子をボコボコになって、歯が折れても殴る親父。昔、プロボクサーやってたから、ハンパじゃない。それに手加減なんかしない。一生懸命殴る。もうこんな父親、少なくなった。今も殴る父親っているけど一生懸命殴ってないんじゃないの。虐待してるだけで。星一徹だって酒飲んで飛雄馬を殴ってたけど、きっと殴りながら飛雄馬のことを思ってた。

息子もどんなに殴られても決して父親を恨んだりなんかしない、むしろ敬愛さえしているように見える。息子の目標は、父親にほかならない。いつか父を越えようとがんばるんだ。「GO」は、あえて忘れてしまった遠い昔の家族の姿を描いているようだ。その昔、父親は、偉かったし、怖かったし、威厳があった。なにしろ毎月給料袋を持って帰って、家族に分配するんだから。

そういえば、先生も怖かったよね。生徒ぶん殴って、鼓膜なんか破ってもあんまりお咎めなかっただろうし。今じゃ、先生は子どもの小間使いみたいなところもある。準備から後片づけまでみんな先生がやっている。子どもは、準備が出来るまで水筒のお茶飲んで、おしゃべりして小休止。もっと子どもにやらせろよ。でも子どもに重いもの持たせて、怪我なんかさせたら大変だ。親から訴えられるかもしれないし。何事もなく平穏無事に一日が終わるのが一番。でも親も先生も大人もみんなもっと悩んでいるんだ。せめて、映画見て考えようよ。

額縁・洋画材料・デザイン用品
大崎周水堂
(271)1696

旗.幕.幟.染用品
どんたくハッピ、博多土産手拭
2階にPOP専用展示場を設けています！
どんたく
染元 川口屋染工店
本店 福岡市博多区上川端14－24 ☎(281)0007㈹
支店 福岡市博多区諸岡2丁目9－15 ☎(575)0007㈹